

## 論文の要旨

論文題目 『方丈記』における「閑居」の世界  
— 〈仏〉〈隠〉融合の視点から—  
氏名 田 云明  
学位 博士（文学）  
授与年月日 平成25年3月25日

本論文は遁世者鴨長明の『方丈記』における「閑居」の再解釈を試みたものである。『方丈記』の前半では、五大災厄を挙げて世の無常を例示しているのに対し、後半では、和歌・管絃を弄びながら、自然を楽しむ「閑居」生活を描いている。従来の研究は、ややもすると『方丈記』の「閑居」を老荘的なものと評価する傾向があるが、そのような固定観念は、『方丈記』「閑居」の本質を見誤らせる恐れがある。『方丈記』における「閑居」を解明するには、より複眼的な視座が必要となる。本論文では、文人、文学活動と隠逸思想の導入の関連性に着眼し、外来文化をいち早く日本に紹介した文人、とくに文人出家者の文学活動に焦点を当て、上代から『方丈記』に至るまでの、表現の型として作られた理想的出家スタイルと信仰生活の特徴を分析し、隠逸思想が仏教思想と融合しながら摂取され、さらに日本化されていく過程を考察した。本論は、主に長明以前の文人出家者における文学活動の役割及び出家スタイルの変遷について検討した第一章、第二章、第三章と、長明を中心に彼の遁世観、数奇観、及び『方丈記』の「閑居」について考察した第四章、第五章との二部に大別される。以下、各章の論旨を略述する。

第一章では、主に仏教思想と隠逸思想を含む外来文化の導入者となる留学僧に注目し、留学僧に纏わる伝記、彼らの詩作及び宮廷官僚との詩文交流についての考察を通じて、隠逸表現の受容と再構築において僧侶が果たした役割を明らかにした。まず、『懐風藻』における僧伝と詩作についての詳細な分析を通じて、本来は隠者に関わる定型的表現が、僧侶の脱俗性・反俗性を際立たせる方法として僧侶の描写さらに僧侶自身の述懐に援用され、それが中国高僧伝の表現類型の一つであったことを明らかにした。そして、『懐風藻』僧伝に隠者に関わる定型的表現が援用されたこと、僧侶自身が詩作に隠逸表現を取り入れたことにより、当時の僧侶が隠者という観念上の存在と同一視される契機となったということを描いた。次に、『文華秀麗集』『経国集』の梵門詩を中心に、嵯峨天皇の御製詩をはじめとする為政者側の僧侶観について考察した。嵯峨天皇が僧侶を隠者、賢才と見なしたことには、明君という自己アピールの意図も込められていること、そして脱俗性・反俗性という〈仏〉〈隠〉の共通点によって、僧侶が隠者と見なされたことを明らかにした。さらに、留学僧としての渡唐経験者で、高い漢文学素養を持つ空海の「遊山慕仙詩」を取り上げて、仏教の立場から〈仏〉〈隠〉の関係を論じた言説を考察した。神仙思想に基づいて「俗界—

小仙界」という二段階にとどまる従来の遊仙詩に対し、空海は「遊山慕仙詩」において、仏教思想に基づいて「俗界—小仙界（隠逸的境地を含む）—大仙界」という三段階の構図をもって、遊仙詩の超克を目指したことを指摘した。従来の研究では、「遊山慕仙詩」と『文選』等所載遊仙詩との関係性のみ言及がなされていたのに対し、空海が入唐時に渉覧し得た中国本土の文学作品や、思想界の動向から受けた影響についてさらなる検討を加えた。これにより、日本の隠逸表現の受容と再構築における空海等留学僧の歴史的役割を改めて確認することができた。

隠逸表現の輸入は一度限りのものではなく、時代の推移に伴い、新たな外来文化とともに次第に日本に伝わってきた。平安中期に至ると、六朝文学の摂取が継続される一方で、唐代文学、とくに白詩の将来により、菅原道真をはじめとする文人官僚の作品が多大な影響を受けた。本論文において注目したのは、白詩、とくに閑適詩に内包される中隠的側面と仏教的側面である。なぜならば、この閑適詩の二側面はすでに〈仏〉〈隠〉の要素を持ち合わせているからである。白居易の生涯を支える極めて重要な思想は「中隠」である。中隠思想の前提は仕官することであるため、とりわけ中国文学・歴史の専門家でありながら、律令国家の官僚でもあった紀伝道出身の文人官僚の共感を呼び、実践も試みられた。第二章では、主に撰関期に生きる紀伝道出身の文人官僚を取り上げ、その白居易閑適詩の受容について、前述した二側面から考察した。具体的には、菅原道真、橘在列、慶滋保胤の文学活動をめぐって、文人官僚の官途の不遇から出家への転向、及び撰関期における文人出家の特徴と意味について、白居易の閑適詩に表われた中隠的側面と仏教的側面の受容を軸にして考察した。彼らは文章経国という儒教的文学観から出発したが、撰関政治の強化及び学問世界の学閥の形成によりその政治的理想が消滅すると、白居易の閑適詩に描かれた「中隠」の閑居生活に憧れ、白詩の半僧半俗の生活にも心の救いを求めたが、結局、実現不可能な「中隠」を断念せざるをえなかった。菅原道真の例からは、日中両国の官僚体制の相違によって官職に込められた強い家門意識が、日本における白氏の中隠思想の浸透を妨げる大きな要因であることがうかがえる。一方で、慶滋保胤の「池亭記」においては、白氏の中隠思想が明確に記述されているだけでなく、〈官〉〈隠〉を両立させる「中隠」の〈隠〉を〈仏〉に移し替えて、〈官〉〈仏〉を両立させるという操作を経て受容されたことを指摘した。従来は、道真をはじめとする文人官僚は白氏のように「中隠」の閑適に安んずることができなかつたと指摘されているが、その原因については解明されていなかった。第二章の考察を通じて、白居易の唱えた「中隠」が日本の文人官僚の間では根づかなかつたことについて、主に撰関政治と学閥による官界と学問の世界の閉鎖性、隠逸に対する社会的認識の限界、出家に対する寛容的社会環境と文人の間に広まった浄土教信仰の流行という、三つの原因を指摘した。本章では、〈仏〉〈隠〉融合のさらなる展開につき、文人間における浄土教信仰の広まりという時代背景、及び白詩に内包される中隠的側面と仏教的側面の影響を確認することができた。

平安中期以降には、貴族社会において官僚体制を離脱する紀伝道出身の文人官僚が現わ

れる一方で、寺院においても、世俗化した寺院・既成教団の体制を離脱する二重出家僧や、当初から民間で布教活動を行なう民間宗教者が多く現われた。第三章では、こうした体制外の宗教者に注目し、彼らの文学的造形及び彼らが理想とした信仰生活に関する記録や文学作品を取り上げて、そのなかに援用された隠逸表現の日本化、さらに日本独自の「遁世」の成立過程を探った。具体的には、遁世という語の意味変化を用語史的に把握したうえで、体制外の宗教者を理想的遁世者像として造形する際の隠逸表現の役割、及び理想的遁世生活と見なされる数奇と隠逸・仏道の関わりについて考察し、〈仏〉〈隠〉がそれぞれ変容しながら融合しあって、「遁世」という日本独自の出家スタイルが形成されていく過程を探った。第三章の考察を通じて、隠逸表現の援用による寺院・既成教団を離脱する遁世僧の造形、及び仏教の日本化が進むなか展開される数奇と仏道の接近が、遁世者像に〈隠〉的要素を付加したこと、数奇に内包される〈隠〉的要素が出家生活に持ち込まれ、〈仏〉〈隠〉がそれぞれ変容しながら融合しあって、「遁世」という新たな出家スタイルが成立する契機になったことを明らかにした。日本独自の「遁世」の成立過程において、仏道を志向する文人と文人出家者の文学活動が大きな役割を果たしたことが確認できる。

第三章に引き続き、第四章は遁世者鴨長明の遁世観、数奇観に焦点を当てて考察したものである。数奇の遁世者でありながら、遁世者、数奇者の記録者でもある鴨長明が編纂した『発心集』を取り上げ、巻一の遁世説話群、及び巻六の数奇説話群を中心に、同時代の説話集に共通する説話と比較しながら、より自覚的に体制外の宗教者を捉え直した長明の独自性を検討した。また、論理的に数奇と仏道の結びつきを展開していく『発心集』の特徴を分析し、そこに投影された長明自身の遁世観、数奇観を探った。具体的には、『発心集』巻一の高僧遁世説話群と遁世聖隠徳・偽悪説話群について、遁世聖の逸脱行為を深山独居、晦跡、「物狂ひ」、隠徳・偽悪の四パターンに分類したうえで考察し、その表現の系譜を隠逸伝、高僧伝類、及び白詩に求めつつ、さらにこうした遁世の有り方と編者長明の経歴との関わりを考察した。また、巻六の数奇説話群については、『発心集』における数奇の概念、長明の数奇と仏道を結びつける方法、及びその意図をめぐって考察した。以上の考察により、長明が理想とした遁世者像に内包される独居、和歌・管絃への没頭という二点の特徴が明らかになった。さらに、白居易の「狂言綺語観」が日本化する過程において、長明が創出した数奇本質論は重要な画期をなしていることが判明した。

『発心集』で造形された遁世者像、数奇者像と同様に、『方丈記』の「閑居」も遁世生活の実録ではなく、鴨長明という文人出家者の文学的営為による虚構である。第五章では、『発心集』の考察で明らかにした理想的遁世者像の特徴を手がかりに、長明の理想的遁世生活の文学表現となる『方丈記』の「閑居」をめぐって、平安末期から鎌倉初期にかけての白詩の受容を視野に入れつつ考察した。具体的には、『方丈記』の「閑居」をめぐって、『方丈記』成立前後に詠まれた閑居題詠の特徴、『方丈記』における「閑居」と浄土の関わり、及び『方丈記』終章の「閑居」否定について考察したうえで、改めて『方丈記』「閑居」の位置付けの問題を検討した。まず、『方丈記』成立前後に詠まれた閑居題詠を白居易の閑適

詩と比較することにより、閑居題詠が寂しく侘びしいイメージから、慈円の「心の宿」に象徴される閑居のイメージへと変化し、定型化する過程において、『方丈記』の「閑居」が、重要な役割を果たしていることを明らかにした。次に、仏教的無常観に基づく前半と、老荘・隠逸思想に基づく後半という、『方丈記』の構成に見られる非整合性に着目し、『方丈記』の「閑居」と浄土の関わりを指摘した。「閑居」を浄土とつながる空間と見なす点は、『方丈記』の最大の特徴である。さらに、『方丈記』終章の「閑居」否定について、『発心集』「貧男、差図を好む事」の結びとの類似性を考察し、長明の「閑居」否定と死の自覚との関連性を探った。最後に、『方丈記』における「閑居」の位置付け、及び「閑居」に込められた文人出家者としての長明の意図について、空海詩の三段階の構図、及び日本における白居易の三教融合の方法の展開と関連付けながら検討した。『方丈記』における「閑居」の二律背反的性格、及び浄土との矛盾は、白居易「狂言綺語観」に内包される矛盾した二つの側面につながっている。そこには、文芸と仏道の両立を図ろうとする文人出家者の特徴が看取される。

要するに、主に文学作品によって導入された隠逸思想の摂取とその日本化において、留学僧をはじめ、文人官僚、さらに文人出家者が大きな役割を果たした。こうした文人、とくに文人出家者の文学活動における〈仏〉〈隠〉の融合過程を経たがゆえに、やがて『方丈記』「閑居」の世界という文学表現の「形」が成立したのである。